

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

列島や酷暑日過ぎて秋に入る

八尾市 右 陣平

△評▽今年から気象庁の用語になった最高気温40度以上の酷暑日。立秋になっても太陽は容赦なく照りつける。

ビール注ぐ分からね歌に拍手して

香川 川本 一葉

△評▽機嫌を取らなければいけない相手なのだろう。これも役目だと思つてがまんする。

炎暑の鴉ひとかけのパン争へる

大阪 芹澤 由美

足上げて下る自転車涼新た

加古川市 伏見 昌子

青時雨ぼつりぼつりと語る恋

鶴ヶ島市 青木 律子

欄れどもまたつながらし蟻の道

札幌市 村上 紀夫

沢水に暮らす三軒秋草

柏市 室崎 育美

学校に残る土俵や竹の春

富士宮市 矢野 悦子

午下り翳も漆黒黒揚羽

東京 松 あき子

青鳥のなかの脱毛サロンかな

秋田市 吉行 直人

西村 和子 選

買ふつもりあるかに叩く西瓜かな

東京 鈴木 智子

△評▽スイカが並んでいると、つい音の手ごたえを確かめなくなる。しかし買つつもりはさらさらない点に、おかしみが漂う。

やうやくに返事を書きぬ夜の秋

神戸市 岸下 庄二

△評▽返事を書きたいと思つていたが、暑さで延び延びにしていた。秋の気配を感じる夜の感情。

一部屋に家族寄り来る霧の夜

河内長野市 守口 幸子

校庭に影ひとつなし夏休み

東京 福島 隆史

雷鳥のよちよち歩き道ふさぎ

羽村市 田中 哲也

病む妻と箸を置きたり遠花火

東大阪市 志賀 克毅

送り火に後姿の消えてゆく

福岡 手島喜美江

雷鳴の只中に聴く地震速報

磐田市 大石 志づ

定命と言われうなずく生身魂

岩手 佐々木松男

朝顔や甘えたがりの方が兄

岡山市 岩橋のり輔

井上 康明 選

田を分つ坂東太郎遠花火

鎌ヶ谷市 佐藤 紀子

△評▽夕暮れの関東平野、一面の田を分けて利根川が流れ、その河口あたりに遠く花火が打ち上げられている。広大な風景を描く。

生御魂最晩年は謡ふごと

広島市 村越 縁

△評▽お盆での年長者。人生の最晩年を迎え、声は健やかで背筋正しく、悠然と構えている。

峰々の影絵となりし秋の水

市川市 高野 厚夫

盆波や崖の上なる海女の小屋

伊勢市 奥田 豊

蕊立てて咲く夜顔の香りけり

直方市 岩野 伸子

風入れの被爆者名簿父の名も

東京 徳原 伸吉

胸の内までは分らず法師蟬

鈴鹿市 岩口 巳年

屋根へ放る乳歯ひとつぶ原爆忌

川越市 益子さとし

色褪すにまかせて風の百日紅

周南市 九内 千沙

水打ちて黙禱の朝迎へけり

東京 山口 治子

片山由美子 選

昼寝本を剥がしてくれてをり

加古川市 中村 立身

△評▽読んでいた本が顔にかぶさっていたのか、はがすに実感がある。誰がとは言わず「くれてをり」と表現したところが巧み。

高木あり凌雲かづら高く咲く

平塚市 日下 光代

△評▽ノウゼンカズラは高いところから朱色の花を垂らす、からむ木がなければ咲き昇れない。

浜風に押し戻されて秋の蝶

福岡 手島喜美江

噴水の天辺何かもどかし

横濱市 菅沼 葉二

エプロンをはづし黙禱広島忌

甲府市 奥野 節子

馴れ馴れしいのころあひ父に聞き

和歌山市 櫻井なほみ

秋めくや風の香りの変はりたる

大阪市 山内かをり

図書館は昼寝の時間木々に影

姫路市 板谷 繁

葬儀まで少し間のあり秋桜

志木市 谷村 康志

口よりも大きな顔に目高の子

奈良市 奥田 誠

米川千嘉子 選

明日から乳児へ昇格新生児泣けば涙が出るようになった

村上市 杉江 正子

加藤 治郎 選

指で行くA地点からB地点入院三日目きょうはネパール

東京 稲山 博司

水原 紫苑 選

朧すぎてほとんど埃めいた月 わかってくれる気がしました

横浜市 街川 二級

伊藤 一彦 選

新聞の一面に見る「平」の文字 一本足で踏み張って立つ

宮崎 門田 藍子

△評▽生後28日未満が新生児。1歳未満が乳児。情報と事実だけでまとめながら、新しい生命への喜びが確かにあふれる。

△評▽スマホの地図だろうか。空想の旅だが計画的である。入院に現実感がある。ネパールに青空が思われ心が解放される。

△評▽ほこりのような月は何をわかってくれるのだろうか。輝きたいのか。捨てられたのか。

△評▽きっと平和の「平」の字だろう。いま世界の平和が危ういことを表現した下の句が卓抜だ。10代の作者のシャープな作風。遣されし父の十年日記には抜け落ちており吾

調べの鼓動

俳句の未来は明るい 星野高士

8月22・23日に俳句甲子園が開かれた。全国の高校生が松山市に集う俳句の大会だ。私は13人いる審査員長の一人として毎年行っている。

29回目となる今年の決勝戦の題は「明」という文字を使った一句。団体優勝を決めた句が、くしくも個人最優秀賞になった。△明日には今日は昨日になる 泳ぐ 下谷陽太▽ これは途中で一字空ぎが入っている、若者らしい発想の一句だ。私は一字空ぎは感心しないが、込められている心情は本物であり、未来を感じさせる。多くの審査員長が推薦し、最優秀賞になった。

優秀賞は各審査員長の一推しの句が選ばれた。私が推したのは△ソーダ水未来 明るいからこわい 保田美季▽であった。怖いと思いつつも、明るいと言いつつ、これで良い句になった。

俳句甲子園では他にもいろいろな題が出されたが、「明」の句を推す審査員長が多かった。△文明はいつまであるか 虫の闇 永井八郎▽△秋桜ありて明るき雨 後と死後 高橋優作▽△邯鄲の塵へ夜明けの加速する 田口葉優▽△明るくて苦しくて檸檬となりぬ 東海林あや▽ 優秀句の半数近くが「明」の句だった。皆さんは高校生の「明」の句を読まれてどう感じただろうか。明るい句がある一方、未来への不安の句もあった。高校生にとって、日本や世界の未来は明るいものになっているだろうか。悩ましいところだ。一つだけ断言できることがある。これだけの俳句が詠める高校生がいる。だから、俳句の未来は明るい。

(ほしの・たかし)俳人



こちらから投稿できます

p/kadan-haidan/

。や同一作品を複数の投稿は趣旨を変があります。入選作はディアやデータペ「ふ」で公開します。